

# 日本周辺高度回遊性魚類資源調査委託事業

山田 浩 且・岡本 楠 清・松尾 剛 平・柴原 浅 行・谷水 宗 美  
大畑 沙 織・中村 明 菜

## 目 的

平成12年（2000年）9月に「中部および西部太平洋における高度回遊性魚類資源の保存管理に関する条約」（MHLC条約）が採択され、平成16年6月に発効された。我が国も責任ある漁業国として本条約への批准手続きが進められている。これに伴い、日本周辺に分布するカツオ・マグロ類も国際的な枠組みのもとに管理されることになる。こうした情勢の中、日本周辺を回遊するカツオ・マグロ類について、資源量評価やその動向の予測、我が国周辺への来遊量の予測等に不可欠な科学的情報を収集、整理することを目的に、独立行政法人水産総合研究センターの「日本周辺高度回遊性魚類資源調査委託事業実施要領」に沿って調査を実施する。本調査事業は水産総合研究センター遠洋水産研究所を中心とする全国的な組織のもと実施された。この中で、本県は県内所属船におけるカツオ・マグロ類の漁獲状況や漁獲物の生物的特性に関する情報収集に当たった。

## 方 法

沿岸小型船による一本釣り（竿釣り、曳縄漁業）および延縄漁業によるカツオ・マグロ類（クロマグロ、キハダ、メバチ、ピンナガ）の県内主要水揚港である和具、浜島、宿田曾、紀伊長島、尾鷲港と大中まき網漁業による水揚げのある奈屋浦港の計6港において、漁業種類別の水揚量調査を実施した。さらに、和具、浜島、奈屋浦、尾鷲の各港においては漁獲物の魚体測定を実施した。また、熊野灘沿岸の大型定置網ではマグロ類が比較的まとまって入網することから、上記6港の集計とは別に県内大型定置網16ヶ統のカツオ・マグロ類水揚量調査を実施した。

一方、近海、遠洋における中型・大型竿釣船の漁獲動向については、三重県漁労通信連合会および近海漁労通信連合会所属の標本船から「無線漁況連絡聴取簿（QRY情報）」の提供を受け、カツオ・ピンナガ漁船の月別、旬別稼働隻数および漁獲量を緯度・経度毎に整理し、漁場の推移や漁況と海況の関連等について検討を行った。

## 結果および考察

収集したQRY情報をもとに、本県所属船のカツオ・ピンナガ竿釣漁場の変遷を漁場図としてとりまとめ、漁場探査の参考資料として関係漁業者に提供した。また、収集したカツオ・マグロ類の漁獲状況、魚体測定データはとりまとめ機関の遠洋水産研究所に提供し、太平洋におけるカツオ・マグロ類の資源量評価や来遊量予測を行うための根拠として活用された。得られた資源評価や来遊量予測の結果については、県下の関係漁業者、団体に情報提供した。資源評価や来遊量予測に関する詳細な情報は、水産総合研究センターから別途報告されるので、ここでは、本県所属船の2004年（平成16年）漁期におけるカツオ・マグロ類の漁況経過について、その概要を報告する。

### 1. ピンナガ漁況

QRY情報に基づく2004年（平成16年）の三重県中型竿釣船によるピンナガ水揚量は4,770トンで、前年（1,929トン）の約2.5倍、平年（1992～2003年平均：1,397トン）の約3.4倍に達し、漁獲統計がある1991年以降では最高の水準となった（図1）。漁獲の大半は3～5月に集中し、この間のみで水揚量は約3,500トンに達し、年間水揚量の約70%を占めた。漁場は青ヶ島、八丈島周辺海域に形成された。当海域で春季にこれほどまとまった漁獲があったのは過去にない現象である。

対照的に大型竿釣船のピンナガ漁況は低調に推移した。2004年の三重県大型竿釣船による水揚量は8,089トンで、前年（14,515トン）の約56%、平年（1992～2003年平均：12,281トン）の約66%と低水準にとどまった（図2）。5～6月は黒潮統流域で高水準の漁獲があったが、漁場がやや西（160度付近）へ移動した7月以降は低調な漁況となり、さらに8月以降は漁獲が皆無となった。例年、夏季以降は東沖漁場～天皇海山海域でいわゆるトロピンチョウが多獲されるが、今期はきわめて低調な漁況となり、トロピンチョウの水揚げに依存する大型竿釣船は大打撃を受けた。

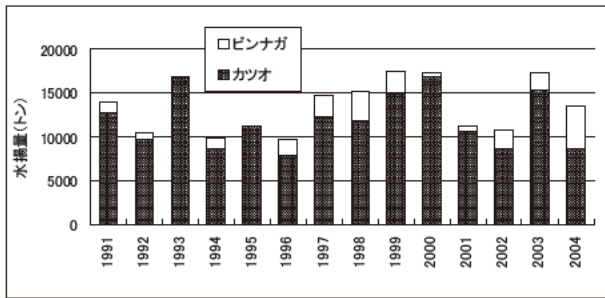


図1 三重県中型竿釣船によるカツオ・ビンナガ水揚量の年変動

## 2. カツオ漁況

三重県主要4港（和具・浜島・長島・尾鷲）における沿岸小型船（曳縄・竿釣）による2004年のカツオ水揚量は419トンで、前年（1,475トン）の28％、平年（1992～2003年平均：1,134トン）の37％の低水準にとどまり、主要4港で漁獲統計がある1992年以降では最低の水準となった。特に、例年盛漁期となる春漁の不振が顕著であった。春漁期の熊野灘海域では黒潮はN型基調で推移し、沿岸域への暖水の波及は少なく、漁期を通じて低水温傾向が持続した。この影響からか、熊野灘沿岸では顕著な漁場形成はみられなかった。加えて、漁場形成が銭州から八丈島・青ヶ島周辺海域に集中し、静岡県御前崎港へ水揚げする船が多かったため、県内への水揚量は低水準にとどまった。

沿岸小型船同様、中型竿釣船によるカツオ漁況も全般に低調で推移した。QRY情報に基づく三重県中型竿船による2004年の水揚量は8,727トンで、豊漁となった前年（15,335トン）の57％、平年（1987～2003年平均：11,148トン）の78％にとどまった（図1）。3月末～6月にかけてE140°～E150°の黒潮前線域～黒潮統流域でビンナガ主体の操業が続いた。全般にカツオの群れが薄いこともあり、この間のカツオ水揚量は2,678トンと低水準で推移し、前年同期（6,099トン）を大きく下回った。7月に漁場は北上し、E145°～E155°の黒潮統流域～常磐沖合が主漁場となった。8～9月には漁場がさらに北上し、三陸沿岸～沖合のN37°～N41°、E142°～E148°の海域が主漁場となった。この間（7～9月）、漁況はやや上向いたものの、水揚量は4,335トンと前年同期（5,322トン）の水準には及ばなかった。10月には漁場が南下し始め、漁況は低調となり、11月末には終漁した。

一方、大型竿釣船によるカツオ水揚量は比較的高い水準を維持した。三重県大型竿釣船による2004年の水揚量は27,313トンで、前年（24,340トン）を上回り、ほぼ平年並（1992～2003年平均：28,479トン）の水準に達した（図2）。8月以降、近海漁場では魚影が薄く、漁獲量が

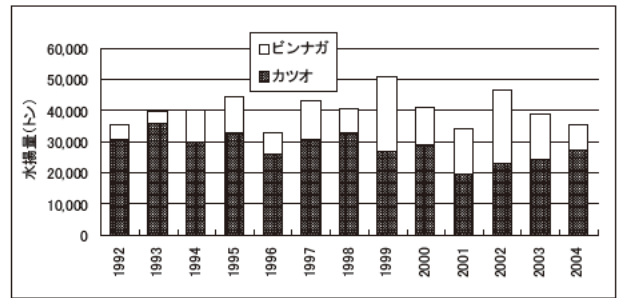


図2 三重県大型竿釣船によるカツオ・ビンナガ水揚量の年変動

急減した。同時に、近年好調のビンナガ漁も極度の不振に陥り、早期に南方漁場に下る漁船が相次いだ。近海漁場での不漁とは対照的に、南方漁場では近年にない高水準の漁獲があり、全体的には近年並の高い水揚量水準を維持した。ただし、南方漁場主体の水揚げで魚価が低迷し、また、前述したビンナガ水揚量の減少も加わり、水揚金額は近年の水準を大きく下回った。

## 3. クロマグロ漁況

三重県主要6港（和具、浜島、田曾、奈屋浦、紀伊長島、尾鷲）における2004年のクロマグロ水揚量は12トンで、前年（20トン）、平年（1995～2003年平均値：31トン）の水準を大きく下回った。熊野灘沿岸でクロマグロを漁獲している主な漁業種類として定置網、沿岸カツオ一本釣、沿岸小型曳縄、まき網があげられる。これら4漁業種のうち、定置網を除くすべての漁業種で前年の水揚量を大きく下回った。熊野灘沿岸におけるクロマグロの水揚げの大半はヨコワである。今期、漁況が低調に推移したのは、ヨコワの来遊量が少なかったことによるところが大きい。ヨコワの主要水揚げ港である浜島港における2004年のヨコワ水揚量は1.0トンで、低調に推移した前年（1.6トン）をさらに下回った（図3）。11～12月に熊野灘沿岸でややまとまった漁獲があった以外は、目立った漁獲はなかった。また、同港における2004年の養殖種苗用ヨコワの採捕尾数も4,590尾と前年（5,492尾）を下回った。熊野灘沿岸に水揚げされたヨコワの尾叉長は、

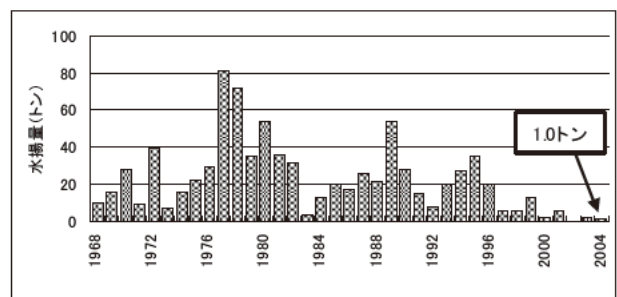


図3 浜島港におけるヨコワ水揚量の年変化  
[点線は平年値（22.9トン：1968～2003年の平均値）]

8月で22～28cm, 9月で30～46cm, 10月で34～46cm,  
11月で40～48cm, 12月で48～52cmであった。

#### **関連報文**

独立行政法人水産総合研究センター：平成16年度日本周  
辺高度回遊性魚類資源調査委託事業報告書

三重県科学技術振興センター水産研究部：平成16年度三  
重県竿釣りカツオ・ビンナガ漁況総括